

27. ^{131}I -MIBG による RI 治療が著効した悪性褐色細胞腫の一症例

岡沢 秀彦 遠藤 啓吾 佐賀 恒夫
小西 淳二 阿部 光幸 (京都大・放核)
河合 忠一 (同・内)

副腎褐色細胞腫摘出術後、肺・肝臓・腹部リンパ節に多発性に転移した悪性褐色細胞腫に対し、 ^{131}I -MIBG 100 mCi (3.7 GBq) を投与し、腫瘍が著しく縮小した症例を経験したので報告した。

症例は 67 歳女性。主訴は頭痛・全身倦怠感・体重減少。昭和 59 年、近医で褐色細胞腫が疑われ、本院へ入院。同年 10 月、左副腎褐色細胞腫のため手術を受けた。術後症状は改善し、良好に経過していたが、昭和 62 年 10 月、再び同様の症状が出現し、肺への転移が認められた。昭和 63 年 11 月、 ^{131}I -MIBG 治療の目的で当科に入院した。

^{131}I -MIBG 100 mCi 投与後、血圧・血糖値は著しく上昇し、全身状態の一時的増悪をみたが、これは血中カテコールアミンの著しい上昇による変化と考えられた。過去に行われた悪性褐色細胞腫に対する ^{131}I -MIBG 治療の報告では、 ^{131}I -MIBG 投与後、こうした副作用を認めた例はなく、比較的安全な治療法と考えられていた。われわれの経験した症例では、腫瘍の大きさは著しい縮小ないし消失を認めており、全身状態も血中カテコールアミンの下降に伴い回復した。本例のように、 ^{131}I -MIBG 治療が著効を示した症例では、一過性にカテコールアミンが上昇し、症状が増悪する可能性があるものと思われる。今後、 ^{131}I -MIBG による RI 治療に際しては、血中カテコールアミンの変動による危険性も十分に配慮した上での慎重な治療計画が望まれる。

28. ^{123}I -IMP が有用であった気管支カルチノイドの一例

西澤 貞彦 左野 明 村上 昌雄
大竹正一郎 藤原 一央 三木 幸雄
川上 光一 桑田陽一郎 高田 育子
三村 文利 正田 智也 小山 雅司
黒田 康正 (天理よろづ相談所病院・放)
比嘉 敏明 高橋 豊 (同・RI セ)

気管支カルチノイドの転移巣に N-isopropyl-[I-123]p-iodoamphetamine (IMP) の異常集積が見られた一例を報告する。

症例は 44 歳の男性で、昭和 59 年 6 月に左上葉の腫瘍性病変のため左上葉切除が行われ、病理組織診で気管支カルチノイドと診断された。昭和 62 年 4 月には黄疸が出現し、膵内胆管に發育した腫瘍が切除され、気管支カルチノイドの転移と診断された。昭和 63 年 9 月、左鎖骨上窩にリンパ節の腫脹が出現し、頭部 CT では多発性の腫瘍が認められた。

IMP は 6 mCi を静注後 1, 5, 24 時間に全身のスポット像と頭部の SPECT を行った。同時期のガリウムシンチでは全身に明らかな異常集積像は認められなかった。IMP スポット像では 5 時間および 24 時間像で左鎖骨上窩のリンパ節に一致して集積増加が見られ、上腹部正中にも異常集積像が認められた。左鎖骨上窩のリンパ節生検でカルチノイドの転移と診断された。IMP で上腹部に異常所見が見られたため腹部 CT が施行され、大動脈周囲にリンパ節腫脹が認められた。頭部 SPECT では 1 時間後に、すでに一部の腫瘍に集積増加を認め、5 時間、24 時間と経過するに従い腫瘍部の集積は著明となった。

この症例ではいわゆるカルチノイド症状や他のホルモン異常は認められなかったが、腫瘍細胞内に豊富な神経内分泌顆粒が見られたことから、IMP が何らかの形で能動的に取り込まれた可能性があり、興味深い症例と思われた。